

「知らない道を行ってみよう」
私たち三人のおじさんは、小型自動車の中で話し合った。山里に住んでいる共通の知人を訪ねる道すがら、県道からの分岐点で小さな冒険を決めた。晩秋の林道を走りながら紅葉を愛でる衝動に駆られての結論だ。晴天と紅黄の葉が、狭くて曲がりくねった林道も快適にさせてくれる。話に夢中の三人は、カーナビのない軽自動車で、モミジ談義と絶景を楽しみながら走った。
妙な違和感が頭をもたげたのは、分岐点から小一時間も走った頃だった。
「もう目的地に着いてもイイのじゃないか」
誰かがボソツと言うと、もう一人も同調しながら不安そうな顔を作った。
「でも、感覚的にはこれでいいように思う。初めて通る道は長く感じるものだ」
1
三人目のおじさんが言うのと、みんなの気持

が少し楽になった。更に走ることも三十分。
「あれ！」
自信を持っていたはずの三人目のおじさんが素つとん狂な声を出した。
みんなが周りを見渡すと、いつの間にか出発した分岐点に戻っていたのだ。何のことはない、一時間以上を浪費して山をぐるりと一巡していたのだ。おじさん達に残された仕事は笑うことしかなかった。
三人の大笑いが消えると、妙な淋しさがみんなを襲ってきた。
「まだ、ボケが来るには早いけどな」
最年長のおじさんが言うと、皆が同感。
「どこかで別れ道を見落としたのだな」
慎重派のおじさんが後悔した。
「最近は、ナビに任せっきりの運転ばかりしているから勘が鈍っているのだ」
運転手役のおじさんが反省を込めてつぶやく。
みんなは、とても大切に振り返しのつかないものを、どこかに置き忘れたような喪失

感に包まれて黙り込んでしまった。

おじさん達は戦後間もない頃に生れた団塊世代の代表選手だ。戦争は知らないが極貧の少年期を過ごしたから、生きる知恵は身に付いている。その自信があるのは、野山を駆け回って十分に五感を磨いてきたからだ。山を眺めるとアケビや山柿、山芋などがある場所を察知した。フナやエビの隠れ場所も、小川の流れ具合を見て簡単に見破った。小鳥の鳴き声を聞いて鳥モチや罨を仕掛ける場所と方法を瞬時に悟る。捕らえた生き物や、採った野山の幸は高感度の嗅覚が食べられるかどうかを的確に判定した。甘柿渋柿の区別や果実の熟度などは、舌先がほんの少し触れただけで確認できる。川で泳ぐ時は、微妙な水温の変化を肌が感じて、これ以上深く潜ってはいけないと警告音を発した。海岸線が見えないほどの沖に流されても大丈夫。十分に研いだ五感が全力で働いて、安全な海岸に誘導してくれる。

4
では、その子たちも次の世代の親だ。孫たち

だから知らない道を走る時でも、特別な装
備は不要だ。五感が高感度ナビゲーションに
なるのは当たり前前の気持ちだった。
「歳のせいばかりじゃないな」
「機械文化に侵されて、五感が鈍ったのだ」
「いや、五感の一部が退化して、三感とか二
感だけになったのではないか」
「五感の連携プレーをコントロールする六つ
目の能力が機能しなくなっただけだ」
感じかたはいろいろある。でも、どんな
理屈を並べても、おじさんたちの背中に冷た
いものが流れるのは避けられなかった。
「三つ子の魂、百まで」という。おじさん達
が三つ子の頃から磨いてきた五感でさえ錆び
始めている。それなのに、おじさん達は自分
の子供らに五感の研ぎ方を真剣に教えなかつ
たような気がする。自分たちが貧困の時代を
生きたから、せめて子供たちにはと、楽な機
械文明ばかりを与え続けたようにも思う。今

の五感の中身はどうなっているのだろうと思
うと、罪悪感さえ生まれる。おじさん達が黙
り込んだのは、それが怖かったからだ。
「要は、人間の野性力が退化している、とい
うことだな」
一人のおじさんが何かを振り払うように大
声で言うのと、みんなが同意して頷き合った。
野性力。聞いたこともない言葉だ。一人の
おじさんが思いついた造語だろう。だけど、
いい言葉だな、と皆が感じ入ったようだ。
まず、団塊世代のおじさん達から行動しよ
う。第一線を離れているから少しは自由時間
がある。大いに山野に出て自然と遊ぶ、そし
て五十年前を復習しながら野性を復活させ
よう。現役世代の息子たちは忙し過ぎるだろ
うからパスだ。まだまだ間に合う孫たちの世
代に、野性力の人工遺伝をやってみよう。
落ち込み気味のおじさん達は、今日の結論
を決めて林道に再挑戦した。